

ルバーク 栽培大全



成松 次郎

はじめに

神奈川県三浦半島では夏はスイカ、カボチャ、冬はダイコン、キャベツの栽培が盛んです。また、大都市の横浜市ではハウレンソウやコマツナなど、湘南では温室のトマトやキュウリがあり、私は神奈川県農業総合研究所（現農業技術センター）などで主にこれらの野菜の栽培技術の開発を行ってきました。

さらに、新野菜といわれた中国野菜、西洋野菜も研究対象としたこともあり、そのなかで、私の最も思い入れの深い野菜はルバーブです。

ルバーブ・人との出会い

だいぶ前ですが、ある雑誌に記載されていたエッセイを読みました。長野県野尻湖のキリスト教会の牧師、太田愛人さんのエッセイで、野尻湖にはルバーブという野菜があって、とても美味しいという内容でした。1923年頃、野尻湖畔に避暑地としての外人村ができ、近隣の農家にルバーブの種子を配布したことから、そこでの栽培が始まったようです。

太田さんは、信州での山の暮らし、山の食事のことを「辺境の食卓」（ヨルダン社、1976年）というエッセイ集を出版され、ルバーブのこと、ジャムづくりのことを書いています。これを読み、ルバーブに興味をもち、いずれ栽培してみたいと思いました。その後、研究所に赴任したところ、なんと見本園に1株のルバーブが植栽されていました。さっそくジャムをつくりました。これが、私とルバーブの出会いです。

そして、中山間地にルバーブを導入することを目的に、新野菜ルバーブの研究課題を起すことになりました。特性を調べ、栽培法の確立、とくに軟化栽培という冬の栽培方法の開発、さらに神奈川県科学技術政策委員会の共同研究として、ルバーブの機能性を神奈川県衛生研究所とともに取り組むことができました。研究期間は、神奈川県農業総合研究所在職中の1984（昭和59）年～1994（平成6）年で、その後は個人の農園で楽しむ程度に栽培しています。

さて、研究に目処がついたころ、太田さんが横浜・上星川教会に転勤してきました。1月に軟化栽培の赤いルバーブを持って教会を訪問し、野尻湖のルバーブのこと、農業のこと、食のことなどについて話しが進みました。その後、野尻湖のルバーブ栽培農家をつれて、研究所にお越しくださいました。

また、築地市場で西洋野菜専門の仲卸店を営んでいた大木健二さんの講演会を聴き、この店では珍しい西洋野菜に出会うなど貴重な経験ができました。そして、ルバーブを納

めている長野県の生産者を紹介いただき、生産地の穂高町や塩尻市などを訪問しました。穂高町では、勝野義権さんの叔父が 1920 年代にアメリカ合衆国シアトルに移住し、そこから根株を導入したということでした。

このように、日本でのルバーブのルーツをたどりながら、ルバーブにこだわり続ける方々との交流ができました。

ルバーブの普及

ルバーブの普及については、研究内容がマスコミに取り上げられ、これを契機に、茅ヶ崎市在住のルバーブをこよなく愛する井川洋介さんのご支援をいただきました。井川さんはワインの営業マンであり、この人の紹介で、鎌倉や湘南のレストランに赤いルバーブを持ち込み、食材としての可能性を探りました。湘南のいくつかのレストランには、その後も珍しい西洋野菜を持ち込み、その利用法などの情報交換を行うことができました。

ルバーブの研究のきっかけは、現地からの研究要望であったため、研究開始から 1～2 年目に、津久井郡城山町（現 相模原市城山町）の畑と足柄上郡山北町のみかん跡地で栽培展示を行いました。栽培は極めて良好で多収でしたが、市場出荷はできず販売先に苦慮しました。山北町のルバーブは、ジャムなどの原料として中堅菓子メーカーに出荷され、ジャムやクッキーに添加した機能性を謳った商品などを開発しましたが、売り上げが伸びず、生産・販売から撤退してしまいました。そのため、現地では栽培に力が入らず、栽培は自然消滅となりました。

この出来事から、ルバーブを含め新野菜の生産と販売は、車の両輪のようにかみ合うことの必要性を痛感しました。

神奈川県ではその後、個人または小グループでの栽培がみられ、最近では、ルバーブは獣害に遭わない野菜として、清川村などの中山間地で栽培され、直売所で販売されています。

欧米の研究

ルバーブの研究はイギリスや北米を中心に行われ、Marshall (1988) の「ルバーブとレウム属の文献目録 (A Bibliography of Rhubarb and Rheum Species)」によればルバーブとレウム属に関する報告は、3,385 編に上ります。わが国では同属の薬用大黄 (*Rheum palmatum*, *R. coreanum* など) について薬用成分に関する報告は多数ありますが、食用ルバーブ栽培に関する研究は見当たりません。そのため、参考資料は欧米の文献に頼り、とく

に Marshall（ミシガン州立大学）から多くの研究支援があり、そのなかで、彼からルバーブの根株の提供を受けたこともありました。しかし、神奈川県でのこの品種の夏越しが困難と判断し、人工気象室で夏越しを試みましたが、人工気象室の運営上のことから、根株の長期維持ができませんでした。そのため、この品種の維持に失敗しました。

アメリカ合衆国では、五大湖周辺に産地があり、各州立大学でルバーブの研究が行われていましたが、Marshall の研究分野は農業機械で、当時、大型トラクターによるルバーブ機械収穫機の開発を行っており、トラクターで収穫するという栽培規模に驚嘆しました）。

1960～80 年代のルバーブ研究の中心は 1948 年に設立されたイギリス・ストックブリッジハウス園芸試験場（Stockbridge House Experimental Horticulture Station）であり、ここから多くの研究データを入手できました。しかし、2001 年に先端農業の研究所（Stockbridge Technology Centre）として改組され、ルバーブ産地の衰退に伴いルバーブの研究は終了したようです。

欧米では、食用ルバーブに関する栽培研究はほぼ終了し、種苗会社や民間育種者による品種改良が行われているのが現状です。

本書では、ルバーブ栽培全般について著者の研究を中心に、欧米での研究の一部を紹介しています。

ルバーブ栽培大全 目 次

はじめに	i ~ iii
I 歴史	1
II 生態特性	11
III 品種	21
IV 露地栽培	27
V 軟化栽培	31
VI 栄養と機能性	37
おわりに	41
参考・引用文献	43

ルバーブ栽培大全

A COMPLETE GUIDE TO FIELD CULTURE
AND DARK FORCING OF RHUBARB

by Jiro Narimatsu

